PLAYERS

国際協力の担い手たち

株式会社資生堂

美しく生きる

創業から140年以上、女性の“美”を追求し続けてきた化粧品メーカー、株式会社資生堂。その強みを生かし、バングラデシュの女性たちと挑戦を続けている。

「家畜を触った後は手を洗いましょう」。衛生の知識を伝える村でのワークショップ

ワークショップで使う資料を入れたおそろいのバッグを持って、村で啓発活動を行う女性たち

日本でも開発途上国でも女性を応援！

「洗顔料はよく泡立ててから使うのがコツですよ」

そんな説明を聞きながら、洗顔料を試してみる村の女性たち。顔に手を当てながら、「さっぱりして気持ちがいいわ」「きれいになったかも?」と、うれしそうに目を輝かせている。スキンケア製品の使用法や衛生・栄養に関する知識を広めることで、女性のエンパワーメントにつなげたい―。2013年からJICAの制度を活用し、バングラデシュでBOP※ビジネスに向けた調査を進めているのが、株式会社資生堂だ。

日本人女性なら、同社の製品を使ったことがある人も多いはず。スキンケアからメーキャップ、美容食品までさまざまな製品を生み出し、89の国と地域でビジネスを展開している。

「この調査を始めたきっかけは、人口が多く発展が見込まれる南アジアで多くの女性たちと出会いたいと思ったこと、そして何より、世の中に役立つことをしたいという思いが創業から受け継がれているからです」と、CSR部の藤沢冬子さんは話す。

女性の生き方を応援したい―。昭和初期、まだ女性の社会進出が一般的ではなかった時代に、化粧品を販売する美容部員の前身「ミス・シセイドウ」という職業を生み出した資生堂。美容についてアドバイスすることで女性の生活を豊かにするとともに、雇用創出にもつながった。「美しくなりたいという思いは、女性にとって生きる喜びや夢を見る力になる。そんな女性を応援したいという理念は、創業当時から変わっていません」。

資生堂の製品を手にしてうれしそうな村の女性。「毎日のスキンケアが楽しくなるわ」と目を輝かせる

しかし、食料や水さえ十分に得られない開発途上国で、化粧品が使われているのだろうか。そんな疑問に対し、藤沢さんはこう話す。「首都ダッカのスラムを訪ねると、どんなに貧しくても女性たちがヘアオイルを持っていて驚きました。〝きれいになりたい〟という女性のニーズはどこにでもあるのだと確信しました」。

BOP層の中でも比較的所得が高い女性を調査してみると、ダッカ近郊のタンガイル県の女性は、洗顔料やクリームを毎日使っていた。そして、「肌の悩みを何とかしたい」「安全な成分でできた製品が欲しい」という声から、特にスキンケア製品の需要が高いことが分かったのだ。

スキンケアをきっかけに生活全体を変える

しかし、スキンケア製品を使うだけで美しくなれるわけではない。「美しい肌になるには、生活環境を清潔に保ち、心身共に健康でなければなりません。美しさは健やかさの上に成り立っているのです」と藤沢さんは話す。ここが最もこだわるポイントだ。

そうなると、バングラデシュの女性たちが直面する課題は多い。例えば衛生面。村の中は牛などの家畜が歩き回り、ごみが放置されてハエがたかっていることもある。〝家畜を触ったら手を洗った方がいい〟という認識はあるものの、それがなぜなのか、理由を知らない人も多い。

また、料理には油をたっぷり使い、山盛りのご飯におかずは魚や野菜のフライなどが少しだけ。栄養バランスが取れていないため、ニキビに悩む女性が多い。野菜に多く含まれるビタミンやミネラルの摂取も、美しい肌を保つためには必須だ。

そこで藤沢さんたちは、健康な生活に必要な知識とスキンケア方法を一緒に広めることにした。それを可能にしたのが、タンガイル県で販売網を持つ現地企業との連携。ここに所属する女性販売員が村々を回って販売と啓発活動を担う。訪問時に村の女性を20人ほど集め、定期的にワークショップを開催する仕組みだ。

「どんな肌の悩みがありますか?一緒に原因を考えてみましょう」。紙芝居などを使って分かりやすく衛生や栄養の知識を伝え、村の女性たちに気付きを与えることが目的だ。

今年1月から、洗顔料、保湿ジェル、日焼け止めのテスト販売が始まったばかり。全ての女性が健康で、そして美しくあり続けることができるように―。その目標に向かって、資生堂の取り組みはこれからますます進化していきそうだ。

※Base of the Pyramidの略で、年間3,000ドル以下で暮らす貧困層の人々。

ワークショップでは、実際に製品を使いながら健康や美容についてみんなで考える。実は、村の男性で興味を持っている人も多いとか

現地で活動する資生堂の大場華子さんと山岸みをさん（前列中央）は、「調査で滞在したホームステイ先のお母さんに、“いつでも帰ってきてね”と言われてうれしかった」と話す